

小学校における和太鼓学習

濱 口 光 太

はじめに

明治以降、日本の音楽教育は西洋音楽と唱歌が中心となって行われてきた。しかし今日、日本の伝統音楽が見なおされている。現行の学習指導要領を見ると和楽器や民謡、わらべ歌等、日本の伝統的な音楽が取り入れられ注目を浴びている。

筆者は、現在三重県志摩市の荒波太鼓保存会に所属し、演奏活動や地元の小中学生の指導を行っている。この経験から和太鼓に魅了され、和太鼓の教材性と小学校教育における和太鼓学習の課題に関する研究を進めるにいたった。

筆者が演奏しているのは現代の創作太鼓であるが、それらの創作曲は地域の芸能や歴史、風土等を題材として構成されている。これらを教材として、子どもたちに郷土の伝統・文化を学ぶ機会を与えたいと考えたことが本研究の動機である。和太鼓の学習をきっかけとして幅広い学習活動を行い、子どもたちに日本や郷土の伝統・文化を愛し、尊重する態度を養いたい。

第一章 和太鼓の概説

第一節 楽器としての和太鼓

和太鼓とは、日本の伝統的な太鼓の総称を指す。一口に和太鼓といってもその種類は様々である。和太鼓は膜の張り方によって、鉦打太鼓と締太鼓の2種類に分けることができる。

(1) 鉦打太鼓

鉦打太鼓は胴の切り口に直接革をあて、ふちを鉄鉦でとめたものである。時間をかけて張った革を鉦でしっかりと胴に打ち付けて留めてあるので、強い打撃に対して耐久性がある。また、胴が厚いことで力強い音や響きのある音を出すことができる。主な鉦打太鼓には胴の長い長胴太鼓、大太鼓（長胴

太鼓の中でも口径が3尺以上のもの)、胴の短い釣太鼓、平丸太鼓等がある。

(2) 締太鼓

締太鼓は円形の鉄枠に革をとじ付け、これを胴に当てロープやボルトで締めるものをいう。革の取り外しや紐の締め具合による音程の変化が容易であること等が特徴として挙げられ、附締太鼓、桶胴太鼓等がその例である。

和太鼓にはこれまで述べてきた以外にも例外が存在し、構造や大きさ、音色、演奏方法も様々である。これらの太鼓の原型は大陸から伝来はしたが、そのままの形では日本に定着しなかったものも多かった。和太鼓は日本の民俗、芸能等の文化の中で独自に発展してきたものということができるのではなかろうか。

第二節 和太鼓の歴史

日本における太鼓の歴史は古く、群馬県佐波郡境町にある天神山古墳から「太鼓を打つ人物埴輪」像が出土したことから、古墳時代（3世紀末～6世紀）には日本に太鼓が存在していたことがわかる。

日本では、古くから収穫に感謝する新嘗祭等の儀式や盟神探湯等の風習が行われてきた。また各地に神を祀る社もつくられるようになった。太鼓はこうした場で神を迎える神具、呪具の1つとして用いられていた。それは古来、太鼓の音は雷（神鳴り＝神の声）に模され、絶大な霊力を持つと考えられていたからである。神聖な力を持ち、大きく遠くまで響く太鼓を打つことは、天の神に願いを届けることになるとされていた。現在でも多くの神社などで神迎え、神送りなどのための神具・呪具として太鼓が用いられているのはこのためである。

日本各地の民俗芸能で神具・呪具として太鼓が使われる中で、太鼓は次第に新しい役割をもつようになる。南北朝時代から室町時代にかけて観阿弥・世阿弥父子によって能が確立して以降、太鼓は能や歌舞伎等の古典芸能の中でお囃子として使われるようになったのである。歌舞伎の囃子では能の四拍子に加えて大太鼓が用いられる。大太鼓を効果的に用いることで雨・風・嵐・雪や幽霊の登場シーン等の写実的表現を行なうことができるようになり、能の囃子とは一線を画すようになった。

また、囃子はそれだけが主体となることはなかった。「囃す」とは「栄やす」を指し、主役を盛り立てる事がその役割だったからである。太鼓が舞台の主役となり、音楽として認識されるようになるのは古典芸能が流行していた時代よりずっと後のことである。

現代の創作太鼓の演奏形態が芸能、音楽の1つのジャンルとして確立され

たのは戦後のことである。御諏訪太鼓、鬼太鼓座、鼓童などのプロの和太鼓集団の出現とその流行をきっかけとして、各地にアマチュアの和太鼓グループが数え切れぬほど誕生した。そして和太鼓は町のイベントへの参加を通しての町おこしや、青少年の育成等に用いられてきた。そしてその音楽性は日本のみならず、欧米をはじめとする世界中で認められている。

これまで述べてきたように日本の太鼓「和太鼓」は神具・呪具から古典芸能の太鼓、そして現代の太鼓音楽へという図式で発展してきたことを読み取ることができる。

第三節 神具・呪具としての太鼓、古典芸能の太鼓、現代の創作太鼓音楽

これまで述べたように日本の民俗における太鼓、古典芸能の太鼓・現代の創作太鼓音楽はそれぞれが強いつながりをもっている。本節ではそれらのつながりについてより詳しく述べることにする。

まず神具・呪具としての太鼓と能や歌舞伎などの古典芸能とのつながりである。古典芸能は庶民の娯楽であり舞台芸能であるが、その発生時には神事と芸能は未分化であった。芸能では、上演前のすべてに先立ってその場に神を迎え、神を楽しませ、最後には神を送らなければならないとされていた。そのため、舞台の正面には櫓を組み、その上に神聖な力を持つ太鼓（櫓太鼓）を据えてたたき、神を迎えていた。つまり太鼓の役割は囃子のほかに神具としての性格も併せ持っていたことになる。しかし、時が経つにつれ神事と芸能は分化し、神具としての太鼓の役割は自然に薄れていった。だが興味深いことに、古典芸能の娯楽化が進めば進むほど、神事としての格式を残したものがその芸能の正統とされ、観衆の心をつかんでいった¹。

その神事としての性格が形骸化してしまった現在でも、歌舞伎では本番30分前の「着到」と終演後の「打ち出し」という合図を太鼓で送る。日本の民俗に裏打ちされた太鼓の響きは我々日本人の心に大きな影響を与えているのである。

次に民俗芸能と古典芸能の太鼓が現代の創作太鼓音楽に与えた影響についてである。茂木仁史は現代の創作太鼓音楽の流れを民俗の太鼓の舞台芸能化、アマチュアの創作太鼓、プロの創作太鼓の三つに大きく分類している²。以下、この分類に従い概説する。

(1) 民俗の太鼓の舞台芸能化

民俗の太鼓を舞台芸能とするとき、演者によって様々な演出が加えられることが多い。現地とステージでは条件が異なるため、完全な再現は難しく、またその行事の一部分を抽出しているため不自然さが生じる。それらを補うために曲構成や太鼓の種類、人数編成の変更等を行い、観る者にその民俗芸

能の雰囲気伝わるように工夫するのである。しかし創作曲の曲構成や精神性等は伝統的な民俗芸能の延長線上に存在しているのである。

(2) アマチュアの創作太鼓

戦後には、それまでにはなかった全く新しい創作太鼓音楽が生まれた。中でも小口大八の存在は大きい。小口はジャズドラマーであった経験から様々な太鼓を組み合わせた「組太鼓」の演奏形態や複式複打法（複数の人数で複数の太鼓をたたく）等の舞台上で演奏するための形態を確立した。また小口はその打法や創作曲の中に民俗的精神性を織り混ぜたことも忘れてはならない。茂木は小口の創作曲について「新しい時代の新しい太鼓音楽に、日本人の伝統的太鼓観をそっくり吹き込み、そのため彼の太鼓はまるで昔からあるものごとく何の違和感もなく受け入れられていった」³としている。小口の登場以降、日本各地で太鼓グループが誕生し、その土地の伝承や風土等をもとにした創作曲を「地域の芸能」として立ち上げていった。

(3) プロの創作太鼓

アマチュアでの活動はさらにショーとしてのプロ活動にも繋がっていく。鬼太鼓座や鼓童、林英哲などがその代表であろう。これら「和太鼓のプロ」が世界各国で活躍し、高い評価を得たことで、日本各地でそれまで以上に和太鼓集団が設立されるようになったのである。

またこれらの太鼓のプロは積極的に伝統的な太鼓や古典芸能の太鼓を学び、そこで得たものを新しい創作太鼓の中に活かしてきた。そして彼らが日本各地の太鼓集団を指導することでアマチュアの活動にも日本の民俗芸能や古典芸能の打法やその精神性が浸透していったともいうことができるのである。

このように「民俗の太鼓の舞台芸能化」「アマチュアの創作太鼓」「プロの創作太鼓」がそれぞれに影響し合い、その結果として今日の「和太鼓」という音楽ジャンルが成立していることがわかる。

第二章 学校音楽教育における和太鼓の扱い

第一節 小学校学習指導要領と教科書における和太鼓の扱い

日本の伝統的な音楽や和楽器が小学校学習指導要領に盛り込まれるようになったのは平成元年版以降である。昭和53年までの学習指導要領では日本の伝統的な音楽は取り扱われず、西洋古典音楽が中心におかれていた。そして平成元年版を経た平成10年版の学習指導要領では日本の伝統的な音楽の学習をより積極的に行っていくという姿勢が読みとれる。

和太鼓の取り扱いについては、平成10年版の小学校学習指導要領解説音楽編には次のように示されている。「旋律や和音を演奏することのできる木琴や鉄琴、あるいは和太鼓などの我が国に伝わる打楽器、さらに、諸外国に伝わる様々な打楽器についても他の打楽器と同様に各学年を通して取り扱うよう心がけることが大切である」⁴とされている。

では実際の教科書において、和楽器や和太鼓を用いた音楽の教育はどのように取り扱われているのだろうか。現行の教科書で扱われている活動内容は大きく分けて3段階に分類することが出来る。まず日本各地の祭りの音楽(郷土の音楽)に触れる活動である。この活動は第3学年及び第4学年で取り扱われている。次に行われる活動はお囃子のリズムを体験したり、自分たちでリズムを創作し、笛、太鼓(締太鼓や長胴太鼓)、鉦などを用いて合奏する活動である。この活動は第3学年から第5学年で行われている。最後に第6学年では旋律楽器である箏や尺八等の演奏や雅楽の演奏(越天楽今様)を鑑賞する活動が行われる。

しかしながら教科書で取り上げられているこれらの活動の内容だけで十分に和太鼓の教材性を発揮した学習を行うことができるのであろうか。お囃子のリズムを体験したり、日本各地の郷土の音楽や伝統音楽を鑑賞するだけでは、それらの伝統的な音楽や楽器のもつ教材性を十分に発揮できないのではないだろうか。しかし現在の音楽科の授業時数や取り扱う内容の多さの中では、十分な学習を行うことは難しい現状にある。筆者はこの問題を解決するため、総合的な学習の時間を有効に活用し、合科的な学習を行っていくことが有効であると考えている。

第二節 和太鼓の教材性

和太鼓には、どのような教材性があるのだろうか。本節では小学校教育に和太鼓を取り入れる利点について述べていく。

(1) どの子どもでも音を出すことができる

和太鼓は演奏方法の単純さから、誰でも特別な技術を必要とせずに音を出すことができる楽器である。誰でも音が出せるということは、音楽表現の基礎能力を培っている初等教育段階では特に重要なことであるといえる⁵。そして和太鼓を演奏した経験は、楽器を演奏した自信と今後の音楽活動に対する主体性を育てることにつながる。

(2) 豊かな表現ができる

和太鼓は強弱、アクセント、音色、速度等の音楽表現の要素を自由に表現することが出来る楽器である。そして和太鼓は前述した歌舞伎の下座音楽の

ように、写実的な表現を表すこともできるため、子どもたちの表現したい内容を容易に太鼓の音で表現させることが可能となる。つまり和太鼓はその曲や子どもの抱いたイメージをそのまま表現し、聞く人にそれを伝えることに適した楽器であるといえるのである。

(3) 和太鼓の耐久性

和太鼓、特に長胴太鼓に代表される鉦打太鼓は非常に強い耐久性を有している。そのため多少乱暴に扱っても容易には壊れない。長年に渡って教材として使えることは学校教育にとってはとても重要なことであるといえる。

(4) 体力の育成

今日、子どもたちの体力の低下が叫ばれている。和太鼓は全身を使って演奏する楽器であるため、子どもたちの体力向上が期待できる。和太鼓の打法は足を広げて腰を低く落とし、演奏することが一般的である。そのため足や腰の筋力を高める効果がある。また撥を持ち、腕を大きく動かして演奏するため、特に背筋力や握力を養うことができる。そして和太鼓の演奏を通じて持久力を養うこともできる。

(5) 他教科や総合的な学習の時間とのつながり

和太鼓は音楽科の授業だけではなく、他教科や総合的な活動の時間のための教材としても活用することができる。例えば、社会科や総合的な学習の時間との関わりを考えてみたい。和太鼓は、日本各地の民俗芸能や古典芸能において、神具・呪具やお囃子として用いられてきた。そして現代の創作太鼓グループが演奏する曲の題材にも、その地域の民俗芸能や伝承、風土等を基にした楽曲が多い。つまりその地域の伝統・文化と深いつながりを持っているのである。音楽科で和太鼓に触れた経験をきっかけにして、地域の伝統・文化に目を向け、調べ学習等に発展させたり、社会科や総合的な学習の時間で学んだ地域の伝統・文化を音楽科の授業の中で表現したりすることも可能である。

(6) 日本と西洋のリズムの違いを感じる学習

和太鼓は体を動かしながら演奏するため、リズム学習に適した楽器であるといえる。最初は、教師のリズムの模倣や口唱歌⁶に始まり、そこから自由なリズム表現や日本の独特なリズム感である「間」や「ため」と呼ばれる表現の学習へ発展していく。「間」や「ため」の概念は西洋音楽の楽譜の通り一定のリズムで曲が進行する音楽とは根本的に異なる。日本の民謡や和楽器の演奏は、大まかな1フレーズの長さは決まっているが、「間」の取り方、つまり音と音との間は即興的に伸縮している。そのずれにより、様々な意味や感じを微妙に表現するのである。このような「間」の考え方に基づけば、西洋のように一定のリズムで演奏することは最も初歩的なものとなるであろう。

第三章 和太鼓学習の展開

第一節 和太鼓学習の課題

本節では、小学校における全国的な和太鼓学習の傾向を探るため、教育雑誌『教育音楽 小学版』1998年1月号～2007年12月号までの10年間に掲載された和太鼓を用いた指導事例を分析・考察していく。これらの実践を分析・考察することを通して、和太鼓を用いた音楽教育の課題について検討する。分析の結果から、和太鼓学習の課題は以下の4点であることがわかった。

- ① 学習の系統性のなさ
- ② ゲストティーチャーに依存した授業
- ③ 表現活動の不足
- ④ 和太鼓の台数不足

以下、これらの課題について詳説する。

① 学習の系統性のなさ

小学校低学年における和太鼓の学習はあまり行われていない。小学校学習指導要領の第1学年及び第2学年の内容では「身近な楽器に親しみ、簡単なリズムや旋律を演奏すること」⁷と示されている。和太鼓には、第二章第二節で考察したようにリズム学習を効果的に行えるという教材性が認められる。しかし和太鼓を用いたリズム学習が行われ始めるのは、多く小学校中学年以降である。

② ゲストティーチャーに依存した授業

今日、地域の教育力をいかに活用するかが課題とされている。和太鼓の学習においてもゲストティーチャーによる授業が多く実践されている。今回分析・考察を行った事例においてもゲストティーチャーを招いての学習が行われている。生の演奏が鑑賞できたり、プロや地域の人と一緒に学習することには素晴らしい学習効果があるであろう。しかしゲストティーチャーによる単発の演奏体験学習を行っただけで、和太鼓の教材性を発揮した授業を行ったと錯覚してしまう教師も少なからず存在するのではないだろうか。

③ 表現活動の不足

和太鼓を用いた表現の学習では、演奏の見た目をよくする事を「表現力を身につけさせる」としている場合が見られる。しかしこれは真の音楽表現力を身につけさせる指導になっているのだろうか。見た目も重要な表現の要素

であるが、和太鼓演奏において重要なことは、子ども達の内側に生まれたイメージを太鼓の音でいかに表現するかにあるのではないだろうか。

④ 和太鼓の台数不足

和太鼓が複数ある小学校は非常に恵まれた環境であるといえる。和太鼓の学習を行う場合、1時間のうちに少しの時間しか太鼓に触れられないのでは子どもの集中力は持続せず、学びは深められない。そして学習に対する意欲も失われてしまうのではなかろうか。

第二節 和太鼓学習の課題解決に向けて

本節では、前節において明らかにした和太鼓学習の課題解決に向けて、分析・考察の結果を基に考えを述べる。

① 小学校教育課程全体で取り組む和太鼓学習

今回の実践分析から小学校低学年では、和太鼓があまり取り入れられていないことがわかった。しかし、子ども達の発達段階に即し、小学校の教育課程全体で、系統的に和太鼓学習に取り組むことが重要ではないだろうか。

具体的には低学年では和太鼓を用いて日本のリズムに親しむ活動を行い、効果的にリズム感覚を養う学習を行う。そしてその指導には口唱歌を効果的に取り入れ、そこからリズム譜に親しむ活動へと展開していく。

中学年では、日本の独特なリズムである「間」を感じる活動を通して、日本のリズムと西洋のリズムの違いを感じさせたい。そのために、地域のお囃子や民俗芸能で演奏される太鼓のリズムの鑑賞等を行う。またそれを発展させ、簡単なリズムの創作活動や、和太鼓を用いて様々なものを表現したり、お互いに鑑賞し合う活動を行っていきたい。

高学年では様々な活動を行うことができるだろう。特に高学年では、他教科や総合的な学習の時間と関連させた横断的学習を行うことが重要となる。

筆者は、和太鼓をきっかけとして様々な学習活動を行うことが出来ると考える。その中でも次の2つの活動を特に重要視したい。第1には、第一章第三節で述べた神具・呪具としての太鼓の役割を取り上げた学習である。神具・呪具としての太鼓から古代の日本人の考え方や生きかたを学ぶ機会としたい。また和太鼓の学習をきっかけとして、地域の歴史や伝承、風土等に目を向け、郷土に関する知見を広められるようにしていきたい。第2に現代の創作太鼓のように、その地域の歴史や伝承、風土等を表現した太鼓音楽の創作である。和太鼓の音楽は現在発展途上にある芸能である。和太鼓の音楽を創作することで、我が国や郷土の文化を尊重し、発展させる精神を子どもたちに育むことができる。そして創作した和太鼓を地域に向けて発表することで地域に根

ざした新しい芸能を生み出すことにつながるのである。

② 教師の実践力を高める

和太鼓の授業においてゲストティーチャーを招き、実際に生の音楽と触れる活動は非常に重要である。しかしゲストティーチャーを招いた時だけの一時的な演奏体験だけで学習が終わってしまってはならない。ゲストティーチャーと行う活動の教育的効果を高め、より深まった授業を行うためには事前の基礎学習や事後の発展的な学習活動が重要となる。そのためには、教師が和太鼓やその他の和楽器についての知見を深め、それらの楽器を用いた地域の祭りや行事等に積極的に参加し、研究することが求められる。しかし現実には個人でそれらを研究することは困難な場合が多い。教育委員会が主導となり、地域の和太鼓についてのワークショップ等を行い、教師の実践力を向上させることも重要ではないだろうか。ゲストティーチャーとして地域の人材を活用するだけではなく、教師の実践力向上のための人材活用を今後より一層活発にしていくことが重要であると考ええる。

③ 表現力を養う和太鼓学習

和太鼓の表現とは前述のように見た目をよくすることではない。その子の抱いたイメージや思いをいかに太鼓の音や動きで表現するのが重要なのである。和太鼓の表現とはただ闇雲に演奏すればよいのではなく、まずは子ども自身が表現したいものを明確にし、それを表現するために試行錯誤することが重要ではないだろうか。そして豊かな表現力を身につけさせるためには、歌舞伎等の古典芸能における表現の技法を学んだり、子ども達がお互いにイメージを膨らませられるように、お互いの演奏の鑑賞や話し合い等の活動を取り入れることが重要である。

④ 少ない太鼓で授業を行う場合の留意点

和太鼓は非常に高価な楽器であり、多くの台数を揃えることは困難な場合が多い。リズム学習を行う場合、和太鼓不足を補う為、マンガ雑誌等を用いた代替楽器を製作する支援が求められる。その他、古タイヤや桶を活用したり、口唱歌や膝をたたいてリズム打ちなどを行うことで練習し、多くの子どもが長時間リズムに触れられるように配慮することが重要となろう。

しかし和太鼓を用いた表現活動や民俗芸能における和太鼓の学習を行う場合では、代替楽器を用いた学習は適さないのではなかろうか。代替楽器では表現できる音に限界があり、子どもの表現したい内容を表現することは難しい。民俗芸能の学習でも郷土の祭り等の本来の雰囲気や情景が伝わらず、より深い学習を行うことは困難であろう。このような現状を鑑みると、何らかの形で和太鼓の本物の音に触れる機会を一度は設けることが重要と考えられる。和太鼓学習ではその学習の目的や意図に応じた教師の支援が求められるのである。

終わりに

本研究では、和太鼓の教材性と今後の課題を中心に論述してきた。和太鼓は古くから日本人の身近な楽器であり、その音色は現代に生きる我々の心にも大きな影響を与えている。和太鼓についての学習を小学校段階で行うことは国際化社会における日本人としてのアイデンティティを養うことにもつながる。

能や歌舞伎等に代表される日本の芸能の多くはすでに成熟し、その様式が確立している。しかし現代の太鼓音楽は未だ芸能としての発展途上にあり、打法や楽器、曲の構成等に様々な創意工夫がなされ続けている。つまり和太鼓は今後、我々や次世代の子ども達の手でより発展させられる可能性を持っているのである。したがって、和太鼓を積極的に学校教育に取り入れ、子ども達に我が国の伝統・文化を継承し、発展させる態度を育てる教育を行っていくことが肝要であると考ええる。

註

- 1 茂木仁史『入門 日本の太鼓 民俗、伝統そしてニューウェーブ』平凡社新書、2003年、pp.117-118
- 2 同書、p.148
- 3 同書、p.156
- 4 文部科学省『小学校学習指導要領解説（平成11年5月）音楽編』教育芸術社、1999年、p.77
- 5 花井清『和太鼓が楽しくなる本[技術編 小中学生の指導]』財団法人浅野太鼓文化研究所、2001年、p.67
- 6 口唱歌とは「ドンドン」や「テンスクテン」などのように太鼓の音を言葉に置き換え、口に出して歌うことを指す。お囃子の稽古や民俗芸能での太鼓は、口唱歌によって古くから口伝されてきたものが多い。
- 7 文部科学省『小学校学習指導要領』国立印刷局、1998年p.65

(卒論指導教員 今由佳里)